総合計画審議会　第２回市民教育専門委員会

○　日　　時　　令和５年３月２４日（金）　午前１０時～１１時４５分
○　場　　所　　市役所６階　大会議室
○　出 席 者　　別紙委員名簿のとおり（委員１０名中７名出席）
　　出席委員　加藤勝委員、草島陽子委員、酒井英一委員、櫻井田絵子委員、
　　鈴木郁生委員、鈴木淳士委員長、照井和委員、
　　欠席委員　伊藤恭子委員、井上夏委員、佐藤司委員、
○　傍 聴 者　　なし
○　協議題等　１　報告・説明
　　(1) 第２回企画専門委員会における協議内容・意見について
　　(2) 市民教育分野への意見への対応と考え方について
　　→質疑なし
　　２　協議
　　(1) 今後５年間の分野別施策の方向性について
　　→主な意見は以下のとおり
　　(2)その他

○　主な意見

（委員）

・基本的な方向性については賛同する。すぐに全部はできないので、「小利を見れば 大事成らず」という論語の教えも念頭に、目先の結果ばかりにとらわれず、一つずつ結果を積み上げていくことを大切にしてもらいたい。
・酒井家庄内入部 400 年事業は、社会教育課と学校教育課がもっと連携して進めていけば良いと感じた。
・鶴岡の特徴として古い学問と新しい学問が共存している。二者択一ではなく、例えば京都のように、市民が共存について理解できるようにまちづくりをしていけると良い。
・郷土資料館が狭隘で資料が溢れている。行政文書も廃校になった学校などあちらこちらに保存されている。また、専門職員も少ないと感じる。保管状態も良くないので、早く新築整備を打ち出してほしい。図書館の老朽化も含め、整備構想もあるようだが、もっとスピード感をもってやるべきだ。

（委員）

・コロナ禍前からの傾向かもしれないが、コミュニケーションが減っている中でコロナが更に追い打ちをかけた。
・男女の出会いの場が少ない。男女ともに奥ゆかしい性格の方が多いのか、声をかけることができずにいるように思える。個人のコミュニケーション能力をあげていく必要もあるのではないか。
・外国人が集まる場で、声を掛けたいけれども掛けられないこともあった。コミュニケーション力を上げるともっと何かできるのではないかと思う。

（委員）
・地域で婚活事業を４回実施したが、結果は２組であった。一人ひとりの魅力を向上することが重要だ。
・自治組織は自分たちで運営するものとして地域住民の結束を呼び掛けてきた。行政はあくまでフォロー。長年かけて作り上げられた地域の結束がコロナの３年間で崩壊したと感じている。再構築にはそれ以上の期間がかかると危惧している。
・住民自治組織の活動支援として、行政はお金での支援を前に出しすぎていると感じている。あくまでも住民が主体という視点での支援を望む。若い世代が住民自治組織から離れている。若い世代に対するサポートをいかにするかが、自分たちの大きな課題と認識している。
・コロナ禍以降、自主防災組織でも様々な事業の停滞や衰退が懸念されている。広大な市域を有する本市の地域毎の自然条件等の違いをふまえた上での体制整備の支援をお願いしたい。
・消防団の手当が個人支給になったことで、団員の結束力の衰退につながっている。団の飲み会も会費制となり、会費を払うことに抵抗がある人もいて参加者が減り、結果として結束が薄れたように感じる。

（委員）
・コロナで３年間夏祭りができず、地域の結束は低下した。コロナを克服していくため、今年は反転攻勢に転じたい。
・空き家問題は、総合計画上の位置付けは環境保全であるが、ひとつのプロジェクトとして取り組むだけのインパクトがある内容だと思う。鶴岡の市街地の空き家でもハクビシンが繁殖し、環境問題にも、もっと広く言えば、まちづくりにも関係してくる。そのため、空き家対策は次期計画では拡充として位置付けていただきたい。
・高齢者の避難行動支援では、町内での昼夜人口が大きく異なり、日中に人がいないことも課題である。高齢化の問題は、各方面に影響する課題として捉えていく必要がある。

（委員）
・大晦日未明の真夜中に発生した土砂災害の事例は、防災の不断の取り組みが生かされた事例と思った。原因究明は学術専門機関に委ねるとして、休暇中の時間帯を選ばない、天候の予測もできなかった事例から学んだことを次に活かしたい。防災や共助、部門間、行政の連携などそれぞれの取り組みが生かされた点、改善点を洗い出す学びの機会として時系列の丁寧な振り返り、総括することで、将来の、また他の地域にも活かされる知恵があると思う。
・鶴岡市の婚活支援について、他地域の独身者は、他の行政にはない制度だと羨ましがっていた。参加予備軍の若者の心情を思うと、「婚活と名づけない」集まりや、婚シュルジュ達をサポートする成婚したての先輩にサポーターになってもらう取り組みもあっていい。オール山形で、三川、庄内、酒田、遊佐などの地域とより積極的に共に取り組むことで相乗効果があるのではないか。
・思いやり、やさしさなどを学ぶ授業の取組みで、ICT（動画）の活用や、話合いの時間はコロナ禍有効であったろうと思う。
・令和７年までにコミュニティ･スクールへの移行が進むことで、地域の方々と効果的な

形で授業を構築することは喫緊のテーマだ。地域の方々に参画してもらうことで、子供達の体験からの学びや地域を学ぶことにきっと繋がるだろう。大きく捉えると、将来のＵターン促進に繋がるのは、このような関わり合いを子供の時に体験しているかどうかで違ってくるのではないか。

・第二の故郷づくりの取組みとして、思いつきではあるが、東京や県外各所の鶴岡に関連する集まり、同窓会活動（学校、地域）などを想定して、その子女たちに向けた孫ターンを呼び込む制度づくりや情報発信があってもいいのではないか。鶴岡で育った親世代が橋渡し役となって、将来、鶴岡に愛着をもち得る若者層との繋がりのために、鶴岡からのメッセージや制度、仕組み、イベントをワンストップで見れるようなサイトとＱＲコードでの宣伝活動が届くのではないか。親世代から子世代へ連携先を広げて考えるのはどうか。

・鶴岡のランドバンク制度を活用した経験から、このような活用事例は良いのだが、同時に景観を損ねている朽ち果てて活用できない空き家も数多く見た。撤去すれば更地となり、税率が上がることから放置されているため、国の税制のもどかしさを感じる。今後も増えることを思うと、何か手立てはないものか。

（委員）

・学びと交流について、学校現場では、「学びは交流」「交流は学び」というようにセットで考えている。

・教育目標は 3 点あり、①知識技能の習得、②思考・判断・表現力の向上、③学びに向かう力の育成である。③については評価が難しいが重要である。

・地域に貢献する人材の育成が重要であり、今勉強していることがどう役立つのか、将来世の中のためになりたいという子供の夢を、③の学びに向かう力に繋げて、子供達から身に付けてほしい。

・小学校の総合学習から高校の探求学習まで、地域と関わりながら知的好奇心を伸ばす教育を進めている。子供は学校だけで学ぶわけではないので、子供は地域の宝という視点で、地域の大人の持っている力を子供達に見せてもらいたい。特に小学校では、生活の支援の面で関わってもらえたら、子供達が育つ環境も良くなる。コミュニティスクールでは、地域の方々の力を活かしたどんなアイデアを出していただけるか、楽しみである。

・コロナ禍でも、読み聴かせ隊の活動を早目に再開いただいたり、見守り隊からも辻立ちいただくなど、地域と繋がりのある学校でありたいと考えている。

（委員）

・消防団員の定数は 3,120 名だが、令和 4 年度の実数は 2,898 名、5 年度は 2,800 名を見込んでいる。年 100 名ずつ減少しており、団員の確保が難しい状況である。

・令和 5 年の女性消防団員は 11 名。女性消防団員の確保が重要であり、今後どう増やしていくのか考えたい。

・班の統廃合については、ポンプ車の最低運用人数が 6 名であるなど、それを下回る人数では機能しないこともあり、各団の意思を確認しながら統合を進めている。

・消防団車両が老朽化している。ポンプ車や小型ポンプなど、更新時期を超えて運用しているものが多くなっている（ポンプ車 25 年超 35%以上、小型ポンプ 20 年超 40%以上）。年々更新時期が延びており、ポンプ小屋の老朽化も含め継続的に更新してもらいたい。